



人の交流が生まれる日曜朝市。地元の野菜をめぐって朝5時から並ぶお客



年に一度の東原ふれあいフェア。町の人口の5倍近い人が訪れ、地元の特産品を味わう



## 過疎の里山に元気を呼び込む

石川県金沢市東原町は、富山との県境にある山間の集落だ。群生する水芭蕉が市の天然記念物に指定され、初夏にはホタルが飛び交う自然豊かな場所だが、過疎高齢化が進んでいる。過去20年で人口が4割減り、現在は約40世帯115人の住民のうち、65歳以上の高齢者が4割を占める。

NPO法人「くくのち」（金沢市）は、東原町を活動拠点に、里山の保全と再生に取り組むグループだ。市内の測量会社の社員たちが、測量業務を通じて東原町の人々と出会い、2007年に会社の社会貢献活動で耕作放棄地を復旧したのが始まりだった。農地に戻したものの、誰かが管理をしなければまた荒れてしまう。10年3月、社員ら10人が集まり、NPO法人「くくのち」を設立した。くくのちとは、日本神話に登場する木の神様のこと。東原町にある、樹齢約700年の大杉にあやかり、命名した。

「東原町の農業を維持するには、40世帯が必要といわれています。いまがぎりぎりの状態で、日に日に限界集落に近づいている。そこで、地域に活力を持たせるための事業を、短期間のうちに次々と打ち出しました」と、くくのちの

代表の山本浩一は、水は清らかで冷たく、土壌は粘土質で、昼夜の温度差が大きい東原町はおいしい米の条件を備えた産地だが、収穫量が少ない。くくのちは、リモートセンシングで水稲の調査を実施し、他の地域の米と「東原米」の違いを明示し、ブランド米として売り出す計画だ。また、復旧農地で栽培したヒマワリから搾油し、バイオ燃料にする研究も、金沢工業大学の土佐光司教授とともに進めている。

多種多様な活動をくり広げるなかで、人の交流が増えてきた。12年度からは、金沢の学生を支援する団体「KAKUMA NO HIROBA」と共同で、インターンシップ（就業体験）を始めた。学生が農家にホームステイし、暮らしを体験しながら、里山の問題の解決策を探る。東原町の住民は学生たちを歓迎し、交流会では、病害虫を追い払って豊作を祈る伝統行事「虫送り」を50年ぶりに復活させた。自然に恵まれ、国道も整備されているが、学校、病院、店舗などの生活基盤が過疎化によって脆弱になっていくのは避けられない。くくのちが12年度から始めた買い

この竹田裕治副理事長は話す。

まず、復旧農地を体験農園にし、街の人が里山と触れ合うきっかけ作りを始めた。くくのちのメンバーも野菜作りを開始。東原町の新鮮な農産物を朝市や市内のスーパーに出品し、流通ルートの拡大に取り組む。

竹林の整備でうまれる竹の活用法も、いろいろ考案した。石川県立大学の石田元彦教授と組んで10年度から進めているのは、粉碎した竹を「能登牛」の飼料にする研究だ。竹の飼料化に成功すれば、竹林の有効利用と、飼料の地産地消に役立つ。

また、竹粉や竹炭を基材にしたコンポストで生ごみを堆肥化する事業にも取り組んでいる。伐採した竹を野菜作りに生かし、生ごみの削減にもつながるこの活動は、セブーンイレブン記念財団の助成を得ておこなわれている。東原町のブランド価値を高めようと、地産品の製品化にも乗り出してい

物支援事業は、簡易店舗「マチオモイ」で一括して注文と荷受けをし、住民が物品を取りに来るシステムだ。東原町には一人暮らしの高齢者が多い。物品を引き取る際にお互いに声をかけあうことで「見守り」につなげようという試みである。

「里山の存続には、若い定住者呼び込み、世代交代していく流れが不可欠です。若い人が住める場所にするにはどうしたらいいか。地元の人たちは里山の将来を心配して、僕たちが新しいことを提案すると熱心に対応してくれます。最近では、街でも過疎高齢化が始まり、学校、病院、買い物問題が生まれている。東原町の取り組みは、同じ問題に悩む地域のモデルになるはず。成功のカギを握っているのは人間関係です。自分たちの活動と考えをちゃんと見せると、興味をもつ人が近づいてきてくれる。そこでまた縁がつくられ、新しいことができる。互いに顔を見て、話して、継続することが大事です」（竹田さん）

水芭蕉の里に、いま新しい息吹が生まれている。課題は山積しているが、地元住民も、くくのちのメンバーも、里山を受け継いでいく考えだ。



竹粉を加えた飼料を羊に与える実験。この飼料でブランド牛「能登牛」を育てるのが目標だ



繁茂する竹は里山のやっかいもの。伐採して活用する道を模索している



竹を基材にした「金沢産ダンボールコンポストの素」。金沢市協同チャレンジ事業に採択され、家庭ごみの減量化に貢献している



農家にホームステイし、過疎化対策を考えるインターンシップ。参加者には東原が第二のふるさとになる



会員制の体験農園。人口減少で目立つ耕作放棄地の活用例のひとつ

セブーンイレブン記念財団が支援しています